

ふるさと の誇り

193



博レポート

遺跡から見た 開拓の歴史



南アルプス市の地形と遺跡の分布図

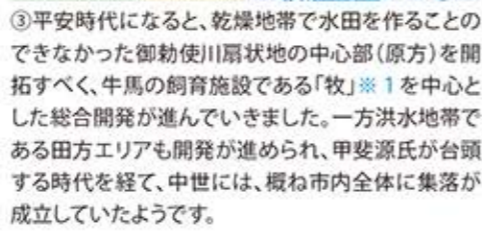
南アルプス市の地形は、標高三一九三mから標高約二四〇mまでと起伏に富んでおり、その特徴から昔から、地形ごとに「山方」・「根方」・「原方」・「田方」地域と呼ばれ、それぞれの地形や環境に適した生業・文化が育まれてきました。

市内にはおよそ四八〇もの遺跡（上図のオレンジで示した箇所）の存在が確認されています。これまでに本格的な発掘調査を実施した遺跡はほんの一部ですが、それらの調査結果からは、先人たちがこの起伏に富んだ地形と上手に向き合い、また、厳しい環境を乗り越えるべく挑戦し開拓してきたフロンティアとしての姿がみとれます。

地形と遺跡の分布関係を観察するとさまざまなおもしろいことがわかります。たとえば根方と呼ばれる市之瀬台地周辺や、御勅使川扇状地末端地域の「原方」と「田方」の境目付近に遺跡が集中しています。山が近く森の資源に恵まれた陽当りの良い高台や、御勅使川が押し出してくる土石流も勢いが減り、少し下れば水が得られる扇状地の末端に集落が集中していたのはうなずけます。ただし、時代を追ってみると、これら遺跡（集落）の立地も開拓の歴史の一過程であることがわかります。

左上に時代を追って集落の変遷の特徴を図示してみました。

洪水を避けつつ、それでも人口の増大に伴って、地面が砂礫ばかりで水田の作れない原方エリアや、洪水を繰り返していた田方エリアを継続して開拓し続け、現在に至るのです。困難な環境をむしろ利用し、乗り越え、命をつないできた歴史が読み取れます。



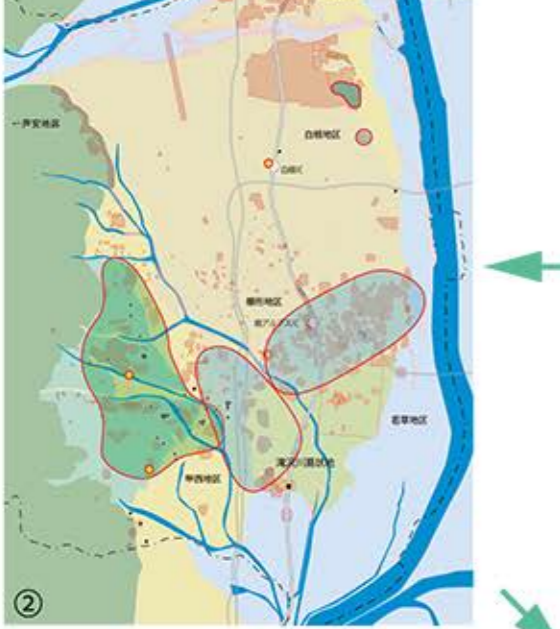
①南アルプス市の歩みは約三万年前の旧石器時代までさかのぼります。山裾の根方地域に旧石器が発見されていますが（図の▲）、その後の縄文時代もやはり根方地域を中心に栄えます（緑の範囲）。その頃扇状地には御勅使川が今よりも南へ流れており、それを避け、且つ、木の実や動物など山の資源に恵まれた地域で縄文人の暮らしが営まれていたようです。

②縄文時代の終わりに穀物の栽培が伝わり、続いて弥生時代に稲作が伝わると、台地上の谷筋で稲の栽培が試されました。また台地下でも、まるで御勅使川の水害と戦いながら、稲作や穀物の栽培に適した地を探しているかのような短期間での営みの痕跡がみられます（図の黄色丸）。

やがて人々は、安定した稲作を目指して、御勂使川の下をくぐった水が湧き出る御勂使川扇状地の末端地域や、滝沢川扇状地などに水田や集落を営みます（水色の範囲）。また、これらの遺跡からは東海地域や信州の特徴を持つ土器が多数出土するなど、人と文化が交差している様子がみられ、この頃に膨大な人口流入があったと考えられます。

③平安時代になると、乾燥地帯で水田を作ることのできなかった御勂使川扇状地の中心部（原方）を開拓すべく、牛馬の飼育施設である「牧」※1を中心とした総合開発が進んでいきました。一方洪水地帯である田方エリアも開発が進められ、甲斐源氏が台頭する時代を経て、中世には、概ね市内全体に集落が成立していたようです。

写真・文化財課



①南アルプス市の歩みは約三万年前の旧石器時代までさかのぼります。山裾の根方地域に旧石器が発見されていますが（図の▲）、その後の縄文時代もやはり根方地域を中心に栄えます（緑の範囲）。その頃扇状地には御勂使川が今よりも南へ流れており、それを避け、且つ、木の実や動物など山の資源に恵まれた地域で縄文人の暮らしが営まれていたようです。

②縄文時代の終わりに穀物の栽培が伝わり、続いて弥生時代に稲作が伝わると、台地上の谷筋で稲の栽培が試されました。また台地下でも、まるで御勂使川の水害と戦いながら、稲作や穀物の栽培に適した地を探しているかのような短期間での営みの痕跡がみられます（図の黄色丸）。

やがて人々は、安定した稲作を目指して、御勂使川の下をくぐった水が湧き出る御勂使川扇状地の末端地域や、滝沢川扇状地などに水田や集落を営みます（水色の範囲）。また、これらの遺跡からは東海地域や信州の特徴を持つ土器が多数出土するなど、人と文化が交差している様子がみられ、この頃に膨大な人口流入があったと考えられます。

南アルプス市ふるさと文化伝承館テーマ展

かつて牧場があった！

古代牧 山麓の南アルプス

2023年
7月14日(金)
12月20日(水)

かつて御勂使川扇状地にあった、牛馬飼育施設「八田牧」について遺跡の出土資料を中心に紐解きます。

※1 南アルプス市の北部には古代・中世に「八田牧」と呼ばれる「牧」があったことが史料により知られています。